

いろいろな教科の視点から眺める、語り合う

# MOVE

特集

## 給食



日文的Webサイト

日文 🔍



算数 × 社会 × 図画工作 × 道徳

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。



心が動く、その先へ。

日本文教出版

# はじめに

日本文教出版の志 (Purpose) は、「心が動く、その先へ。」です。

これには、『心の動き』から生まれる一つひとつの考えや表現を尊重し、それを共有したり認め合うことで一人ひとりの世界が広がっていく。そんな学びが循環する社会を実現したい」という想いが込められています。

そして、こうした社会の実現に向けた

取り組みの一つとして、「いろいろな教科の先生方が同じテーマで語り合い、混ぜり合うことで、互いの世界が広がっていく」、そんな体験を全国の先生方にお届けできないかと考え、『MOVE』を創刊いたしました。

本書がみなさまにとって、「世界が広がる、そして、次の『やってみたい』が湧いてくる」きっかけとなれば幸いです。

心が動く、その先へ。

これが好き。なんでだろう？ もっと、知りたい。  
心が動く、瞬間。それは、「学び」のはじまり。

感じ、考え、想像し、表してみる。  
そこから生まれる、一つひとつが、あなただけのもの。

それを贈り合ったら、うれしくなる。  
心が満ちて、次の「やってみたい」が湧いてくる。  
ほかの誰かと混ぜり合ったら、ちがう景色が見えてくる。

そんな学びが、  
あなたの、みんなの世界を耕していく。

私たちは、学びのはじまりを大切にし、  
その先に広がる一人ひとりの未来をともに育みたい。

心が動く、そのそばで。

# MOVEの構成

『MOVE』は、「いろいろな教科の先生方が、同じものを各教科の視点から眺めたときに感じたこと、考えたことを語り合う」という機関誌です。具体的には以下の2つのコーナーで構成されています。

## 1 心が動く、考える、表す。

いろいろな教科の先生方が、同じものを各教科の視点から眺め、それぞれが感じたこと、考えたことについて執筆するコーナー。

例) コンビニ



ポイント還元って  
本当にお得なのかな？



形と色にあふれてる！  
子どもたちならどう並べるだろう？

## 2 贈り合う、混ぜり合う。

「心が動く、考える、表す。」コーナーを執筆した先生方の座談会。互いの原稿を読んで感じたことや考えたことについて語り合う。



算数ならではの視点が  
面白かったです！

同じものに着目したけれど、  
考えていることは  
全然違いましたね！

# 特集 給食

友達や先生とおしゃべりしながら、好きなものや、苦手なもの、普段はなかなか口にしないものをいただく「給食」。子どもだけでなく、先生にとっても一日の中で特に楽しみな時間かと思います。そんな「給食」を各教科の視点から眺めてみたら、どんなことを感じたり、考えたりするでしょうか。

## Contents

### 04 特集：給食

### 06 心が動く、考える、表す。

**社会** 給食は「当たり前」ではない？  
給食には人の思いがいっぱい！

**道徳** 「給食×道徳」で、体も心も育みたい！

**図画工作** 給食は図工だ……！

**算数** ハニーレモントーストがかけ算の学習に！

### 14 贈り合う、混ざり合う。

**座談会** 箱崎由衣×水野裕介×武藤由希子×  
橋田朋憲





心が動く、考える、表す。



先生方に、各教科の視点から「給食」を眺めたときに感じたことや考えたことについて語っていただきます。

給食は「当たり前」ではない!?  
給食には人の思いがいっぱい!

### 給食が好きになる社会科の学習

私は、自分が小学生の時、給食の時間があまり好きではありませんでした。ですが、日々の社会科の学習によって毎日何気なく食べていた給食への考えが変わり、学年が上がるごとに給食の時間が好きになっていきました。今では、子どもたち



と一緒に給食を食べるひと時が、一日の中でも楽しい時間です。そう思えるようになったのは、学校での学びがあったからだと思います。特に、社会科での学びが、私の給食への思いが変わるきっかけになったと思っています。

例えば、社会科の6年生の歴史の学習では、日本の食文化や給食の歴史に触れることで、子どもたちの心が動くと思います。昔はどのようなものを食べていたのか、いつからなぜ給食が始まったのか、などを当時の時代背景と関連させながら調べることで、今の給食に至るまでの人々の思いを考えることができます。また、給食には、さまざまな食材が出てきます。5年生の社会科の食料生産の学習では、日本の農業や水産業について学習します。その食材は、どこでどのように生産し、どのように届いているのかなどを調べて考えるこ



とで、子どもたちの心が動きます。それまではあまり考えずに食べていた子どもたちが、給食には見えないたくさん人の思いがあることを感じることで、給食を食べるときに、「この野菜もつくってくれた人がいるんだね」「お米を一粒一粒大切に食べるようにしましょう」など、毎日何気なく食べていた給食への考えが変わり、行動に表れてくる

と思います。

社会科では、「人の生き方や考え方」を通して子どもたちが学ぶことができる単元づくり、また、子どもたちが「自分とのつながり」を感じ、自分事として考えることができるような授業を心掛けています。そうすることで、子どもたちが主体的に学習に取り組み、世の中のさまざまなことに興味を持って生活したり、「当たり前のことが実は当たり前ではない」ことを知ることで、ふとした行動や考えが変わっていったりするのではないかと思います。

武藤 由希子  
横浜市立本牧小学校 教諭

好きな給食はあげパンです。  
子どもたちと給食の話をするのが毎日の楽しみの一つです!





「給食×道徳」で、  
体も心も育みたい！

給食の時間を、道徳でもっと豊かに

「いただきます！」笑顔あふれる給食の時間。好きなものも、苦手なものも、クラスの仲間と一緒に食べるとおいしく食べられるから不思議。「牛乳は苦手だったけど、学校の牛乳はおいしいね」1年生の担任をすると、よく聞くフレーズです。「みんながたくさん食べていることを、調理員の方々が喜んでたよ」と声を掛けると、次の日はさらに残飯が減る。このような経験のある先生は多いと思います。

給食では、「感謝」「礼儀」をはじめ、「生命の尊さ」「伝統と文化の尊重」など、多くの内容項目に触れ、学びを得ることができます。その際、「食べ手」の立場だけでなく、「つくり手」「運び手」「食材」といった異なる視点に立ち、「給食を食べる」という行為を捉えることが大切です。

例えば、「給食はこうにつくられているんだよ」と調理している様子を動画に撮って視聴します。3分ほどの短い動画です。大きな鍋に大量の食材。手際よく調理をする調理員のみなさんの姿。動画を見たあと、「これを見て、どんなことを感じましたか」と問うと、児童はさまざまな発見や感想を言葉にしてくれるでしょう。つくり手の姿を知ること、新しい気付きや思いが生まれます。児童の感情の中には、驚きや興味もありますが、自分たちの給食をつくるという自分に向けられた行為を見ているのですから、喜びや感謝の思いも生まれます。さまざまな意見が出たあとで、



教師は「給食はこうしてつくり、毎日みんなの前に並びます。今日の給食も楽しみですね」と締めます。

10分未満でできる指導ですが、「つくり手」の立場や思いを意識できた児童は、それまでとは異なる様子を見せてくれます。味をかみしめて食べる子、「おいしいね」と感想を口にする子、クラスに残飯が減ったり、食器の片づけが丁寧になったり。教師が「残さず食べよう」「きれいに片づけよう」と指導するよりも、児童の行動変容につながることも。それだけ、給食は児童の心に響く教育環境だと感じます。

時間になれば当たり前提供される給食が、特別なものに見えてくる。「いただきます！」の言葉に込められる思いが深まっていく。そんな取り組みを、これからもしていきたいです。給食は、まさに生きた教材です。



箱崎 由衣

港区立筈(こうがい)小学校 教諭

大人になっても給食の時間が待ち遠しい！子どもに負けず、もりもり食べています。





図画  
工作

心が動く、考える、表す。



給食は図工だ.....!

### 「味わう」ことでつくられる「私」

「なんか茶色の具合が同じだね」  
妻の一言にハッとしました。

焼き色、しょうゆ、みそなどが織りなす茶色。焼き加減や味の好みから、自然と家庭の食卓に並ぶおかずは似た色合いになるのでしょうか。隣の家はまた違う具合なんだと思います。給食は多くの方が関わってつくられるもの。茶色の具合をはじめ、家庭には並ばないさまざまな形や色があります。その違いを受け入れてみる、楽しんでみることのできる機会ではないでしょうか。

加えて、給食は、多様な食の体験を通して自分なりの思いが生まれる学びの多い時間だと感じた出来事がありました。先日、戦時中の食事を再現



\*食育メモは、目黒さんが中心で、教室にはったりしてね\*

#### 7月 15日 の食育メモ

#### 戦後80年 食事の大切さを学ぼう

##### 知る 戦争中 食べられなかった時代

1945年(昭和20年)8月15日に戦争が終わりました。戦争中は、食べ物ほとんど手にたらず、明治時代に子どもたちの成長を助けるために始まった給食も続けられなくなりました。子どもも大人もみんなお腹を空かせていました。

##### 考える 比べてみよう 戦争後と現在の身長



##### 体験しよう 戦争中の食事

戦争中の朝・昼・夜の食事をひとつひとつの皿で再現しました。みんなにとっては1食分の給食ですが、戦争中の子どもにとっては1日分の食事です。日々の食事に感謝しながら、戦争中の食事を体験してみましょう。

した献立(図①)をいただいたときのこと。栄養士さんから配られた食育メモ(図②)には、戦時中と現在の平均身長と比較や、一食分の給食が一日分の食事だったことが記されていました。図画工作専科の私は職員室で食べていましたが、担任の先生に聞くと、子どもたちは食育メモを読みながら当時の子どもや食事をつくる人の状況や気持ちを想像し、じっくり見たりよく味わったり「残しちゃいけないよ」と声を掛け合ったりしていたとのことでした。給食に込められた大人が伝えたい「価値」が手渡されたことで、子どもは新たな自分を獲得したのだと思います。

初めての茶色を受け入れて「これもありだな」と感じたとき、苦手なピーマンが味の工夫で食べられたとき、つくった人の思いを想像したとき、隣の友達とおいしさを共有したとき、子どもの生活は豊かになっています。

図工の授業では、子どもたちは、さまざまな形や色に出会い、その捉え方の違いを受け止め、認め合い、自分なりの意味や価値をつくりだしていきます。まさに「給食をつくり提供すること/食べること」と「図工の題材を手渡すこと/学習に取り組むこと」とは、大人の願いを受け取って子どもたちが自己理解・他者理解を深めていく過程、という意味で同じだと思います。

給食も図工も、「価値を込めてつくられたもの」を「味わう」ことをきっかけに生み出されたさまざまな価値観や思いを、「新しい自分」として心のバインダーに留めていくことで今日の私をつくっていく時間かと思っています。いつもおいしい給食をつくってくれる栄養士さん、調理員さんに感謝しています。

橋田 朋憲  
八王子市立船田小学校 指導教諭

給食のおかげで(小中高ずっと) 皮のにおいさに気付きました^\_^



## ハニーレモントーストが かけ算の学習に！

### 給食が「おいしい」学習の時間に

ある小学校では、食育に力を入れていて食に関する「食トーク」を教師が進んで子どもに問いかける文化が根づいていました。文部科学省も「学校における食育の推進」を掲げ、子どもたちに「食は大切」「食は楽しい」を伝えることを推進しています。

ある日の給食の時間、2年生の教室でこんな会話が 있었습니다。「このハニーレモントースト、おいしい！」「ああ、幸せだなあ」「うちでも食べられたらいいのに……」

「給食だより」の裏面を見ると、給食のレシピ(調理室手配表)が示されています。そこには、次のように書かれていました。

### ハニーレモントースト

つくり方 (1人分)

- 1 ・バター…5g  
・はちみつ…4.5g  
・レモン汁…0.5g  
・グラニュー糖(砂糖でもよい)…2g  
を混ぜ合わせる。

- 2 パンに①を塗って焼く。

給食では塗ってから焼きましたが、おうちでは焼いたパンに塗ってもよいです。ぜひ、おうちで給食の味を楽しんでください。

このレシピを紹介すると、「うちでもこの味が食べられる！」と小躍りする子、教師の話聞きながら、メモまで取りだそうとする子、3人家族なら×3、4人家族なら×4……。

この場면을算数の問題にするなら「自分の家族

にハニーレモントーストをふるまいます。材料はどれだけ準備すればよいでしょうか」となるでしょうか。自分の家族構成を考え、必要な材料の量を計算することでかけ算の意味理解につながります。

家庭でもこのことが話題になり、ほかの料理でもやってみようということにつながるかもしれません。また、もう少し学年が上がったときには、「学校全体ではどのくらいの材料が必要なのだろう」と大きな数で考える課題に取り組むこともできるでしょう。調理室手配表は各学校の栄養士(または栄養教諭)が持っていますので、子どもたちが大好きなメニューの時にはぜひ用意してみてください。

給食という子どもにとって身近なところから学習の入り口が開かれるということは、学習に向か

う大きな動機になりえるでしょう。教師が「給食は子どもと食について考える学習の時間でもある」という意識を持つと、食と学びの関連をより多く見つけられると思います。

昼ご飯を食べるという楽しい時間が、子どもたちの興味を引き起こし、学習につながり、豊かな人生をつくっていく。給食だけに「おいしい」時間になること間違いなしです。

参考文献：文部科学省、令和7年度健康教育・食育行政担当者連絡協議会「学校における食育の推進」([https://www.mext.go.jp/content/20250523-mxt\\_kenshoku-000018654\\_0087.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20250523-mxt_kenshoku-000018654_0087.pdf))

### 水野 裕介

調布市立上ノ原小学校 教諭

小学3年生の時、カレーの配膳量で親友ともめて三日間口を利かなかったことはいい思い出。



「給食」をテーマとしたお互いの文章を読んで感じたこと、考えたことについて語り合います。

# 贈り合う、 混ぜり合う。



道徳

箱崎由衣

×

算数

水野裕介

×

社会

武藤由希子

×

図画工作

橋田朋憲

## 眼鏡の違いと根っこにある思い

—ほかの先生方の文章を読んでみて、どのようなことを感じられましたか。

**箱崎**：同じ給食に対してもいろいろな見方があって、それはきっと、それぞれが掛けている眼鏡が違うからなんだろうと思いました。私はどうしても人の気持ちとか、そこに脈々と流れる感情とかに注目しがちなんです。でも、みなさんの原稿には、「彩りや見た目」「かけ算」「産地や配送」など、私にはなかった視点がたくさんあって、読んですごく面白かったです。

**橋田**：箱崎先生が書かれていた「視点を変えて一つの事象を見る」という考え方がすごく面白いなと思いました。

**箱崎**：「一つの事象をさまざまな視点から見る」

というのは、社会科にも言えることですよね。武藤先生が書かれていたように、例えば、5年生の食料生産のところでは、生産者だけでなく、輸送に関わる人など、さまざまな立場の人に注目して学習していきますから。

**武藤**：そうですね。私も日ごろから社会科と道徳はつながるところが多いと感じています。というのも、社会科の学習指導要領には「消費者の願い」や「人々の願い」など、「願い」という言葉がしばしば出てくるんですね。さまざまな人の願いにも着目して学習していく。だから、「社会科と道徳は親和性が高い」と感じるのかもしれない。

**水野**：私の前任校は食育に力を入れていて、校長先生から「その日のレシピや給食に関するメモを読む時間を毎日必ず取ってほしい」という指示があったんです。そこで私は、子どもたちが算数以外の

にもいろいろな教科の学びが得られるように、例えば社会科を意識して「今日のメンチカツに使われている牛肉は〇〇産でね……」とか「この食材はどこでたくさん取れるか覚えてる？」といった話をしていました。だから、自分ではいろいろな教科の視点を持って指導していると思っていたんですけど、今回みなさんの原稿を読みると、まだまだ自分では気付いていない視点がたくさんあると思いました。橋田先生の原稿を読んでから改めて給食を見てみると、「給食って真っ茶色ということではなくて、彩りが多いんだな」と気付きました。今度、私もみなさんが書かれていたことを学校で子どもたちに話してみようと思います（笑）。

**橋田**：互いの視点の違いも面白かったですが、共通点があるというのも面白かったですね。どの文

章も「給食の時間を豊かにしたい」とか、「子どもを豊かにしたい」という根っこにある思いは同じだった。

**箱崎**：たしかに共通点もありましたよね。橋田先生が書かれていたように、「私たちが伝えたいことや価値を子どもたちに手渡して、それを子どもたちがかみ砕いていく」というところはどの先生も同じだと感じました。それに、今回同じテーマを扱ったことで、どの教科も密接に結びついているのを感じました。私は、特に算数と道徳は遠い存在だと思っていたんです。でも、水野先生の原稿を読んで、人数分の分量を計算するという数学的な行為の裏には、「食べたい」「ふるまいたい」といった思いがあることを再認識して、他の教科が遠い存在だというのは自分の思い込みだったと気付きました。

## 人との関わり、感謝の気持ち

— 給食の時間の取り組みとして、文章で書かれていたこと以外に、各教科の学びを意識して行っていることはありますか？

**箱崎**：私の勤務校には調理員さんがいるので、完食が続くと「本当によく食べてくれてうれしいよ」と教室に言いに来てくれるんです。そうすると子どもたちも「残さず食べよう」という気持ちになるみたいで。だから調理員さんに「教室に来てください！」ってお願いすることがあります。

**水野**：調理員さんに感謝の気持ちを伝えるためにみんなで給食室に行ったことがあります。

**箱崎**：ああ～それもいいですね！

**水野**：みんなで「ありがとうございました」と言ったら調理員さんがすごく喜んでくれて。子どもたちが低学年で、感謝の気持ちをどう行動に表したらよいかわからないという時は、「じゃあ行ってみる？」とこちらから声を掛けてあげるの、す

ごく大事じゃないかと思うんです。

**橋田**：給食室に行くのは1年生ですか？

**水野**：1年生の生活科で学校探検の時にいきます。

**橋田**：生活科は社会科にもつながっていきますよね？

**武藤**：つながります！「人との関わり」という視点では、給食は当たり前ものじゃなくて、そこには関わっている人がいるということがわかると子どもたちの意識が変わり、それに伴って行動も変わっていきますよね。

**箱崎**：そうですね。それから「お父さんやお母さんも家でご飯をつくってくれている」などと自分たちで気付いていく。子どもたちは考える視点を与えられると、すぐにその視点で自分のものにして、いろいろなことに気付いていく。だから、水野先生が書かれていたみたいに、例えば、献立表もただ渡すんじゃなくて、「3人家族だったらどうすればいい？」などと言って渡してあげるのが大切なんだろうなと思います。

## いろいろな教科の学びを含む家庭科

**橋田**：家庭科の話になってしまうのですが、例えばみそ汁をつくるとしたら、教科書には、みその分量は細かく指定されているんですか？

**武藤**：一人分何gとかって出てきますよね。それこそ、水野先生の文章の「何人分だから何g」というのは、家庭科の時に学習します。

**橋田**：なるほど。じゃあ、こんな授業とかできそうですね。子どもたちに家で自分がおいしいと思ったみそ汁のみその分量を量ってきてもらう。学校でそれを持ち寄って、クラス全員がおいしいと思えるみそ汁にするには、みそを一人当たり何gにすればいいのかをみんなで考えてみるとか。

**水野**：ああ～面白い！

**箱崎**：以前、家庭科の先生が似たような授業をされていました。まず全員が教科書に載っているレシピでみそ汁をつくって食べてみる。そして子

どもたちに味はどうだったかを聞いていく。「ちょっと濃い」とか「薄い」とか意見が出たら、「人によって好みがあるよね。じゃあ、自分がおいしいと思うみそ汁のレシピをつくってみよう。そして、みんなで食べ比べてみよう」と展開していくんです。料理が好きな子は、分量を細かく量りながら研究して。家庭科の授業ってすごくいろいろな教科の学びを含んでいると感じて、面白かったです。

## 感性を育む給食

**箱崎**：味だけでなく橋田先生がおっしゃっていた色味に注目してみると、さらにいろいろなことに気付きますよね。私は道徳で日本文化の教材を扱うとき、食器の話もするんです。やっぱり見た目で味が変わるじゃないですか。「見た目で味が変わるよね」と話をする、子どもたちは、注意深く見るようになって「料理屋さんで出している器は全然違った」と気付くんです。そして、「見た目を味わうって文化があるんだね」と話をしています。

**橋田**：実際に器の色によって味が変わるといっているのはあるそうです。クロスモーダル応答といって、例えば、赤い器は白や黒の器に比べて、塩味やうまみを強く感じさせる効果があるらしいです。\*それに、色だけじゃなくて、食事をするときに、「この面白いなあ」と思えるだけでもすごく楽しい。

**水野**：たしかに子どもたちは、ABCスープ（アルファベットの形をしたマカロニが入った野菜スープ）が大好きですもんね。

**箱崎**：ABCって順番に並べていきますよね。すごい注目度になって思います（笑）。やっぱり子どもたちは形にすごく注目する。形が違うだけで苦手だったものが食べられるようになることもありますよね。

**武藤**：そうですね。にんじんが苦手な子が、形が星になっているだけでうれしくて食べられたなん



てことができました！

**水野**：おなかに入れれば一緒と言う人もいるけど、形や色によって食欲が湧くっていうのは子どもにも伝わっているんですね。

**橋田**：昔に比べて食器も変わりましたよね。

**武藤**：変わりましたよね。食器によっておいしさも違う気がします。

**水野**：昔の食器だとスプーンをつけるとじゃりじゃりと音が鳴るので、その音が苦手という人もいますよね。

**橋田**：わかります。音も食器によって全然違う。給食は、そういう言葉にできない感覚的なことが結構詰まっていますよね。

**箱崎**：それこそ文化が詰まったものじゃないですか。面白いなと思って食べてくれるような時間になったらもっと豊かになりますよね。

**武藤**：文化に触れるという話だと、私の学校では、給食にいろいろな国の料理が出てくるんです。社会的な視点で言うと、給食がさまざまな国の食文化を知るきっかけにもなっていると思います。



## ボーダレスな子どもたち

—ここまで「給食にはいろいろな教科の要素が詰まっている」「自分では気付けない視点があった」とのお話でしたが、改めて「視点や見方」について考えたことはありますか？

**箱崎**：私も含めて教科を専門的に研究している先生ってその教科を愛し過ぎてしまう傾向にあると思うんです。不可侵というか、合科しようと話が拳がっても「道徳の時間は削れません」みたいな。ほかの先生からしたら「いや、削れて言うてるんじゃないんだよ。一緒にやろうって言うてるんだよ」って感じだと思うんですけど(笑)。「これは大事なので省けません」とか「算数はちゃんとやらなきゃいけない」とか、結構自分の教科を守り過ぎてしまう。たしかに専門の教科を愛して真剣に向き合うことは大切だと思います。けど、それで視野が狭くなってしまったら、その教科の視点だけで授業をデザインして、その教科の視点

だけで子どもを見取ってしまう。子どもたちも「この先生の授業は社会科だから社会の話しかしてはいけない」みたいになってしまう恐れがあるんじゃないかと思うんです。だからこそ、今回先生方の原稿を読んで、やっぱり自分もさまざまな教科の視点で題材や子どもたちを見るように意識してきたけれど、意外とできていなかったんだと痛感しました。以前、社会科の授業をしたときに、「道徳的だね」と言われたことがあったんです。その時は、なぜそう思われてしまったのかあまり深く考えなかったんですが、社会科の視点で自分の授業を捉えることができていなかったんだと思います。

だから今回、一つのテーマを介して、いろいろな教科の先生から各教科の視点でお話を聞いて、自分の世界が広がったことを実感できたので、すごくいい経験になりましたし、教科専門の先生からお話を聞く大切さを感じましたね。

子どもたちにとっても、一つのものをいろんな教科の眼鏡を掛けて見ていく体験は、これからとても大切なんじゃないかと思います。

**橋田**：大人は教科の違いを意識しがちですけど、子どもたちは割とボーダレスですよ。例えば、図工でナタデココをつくりたいっていう子が展開図を活用したり、棚をつくる時に木を3等分したり、歴史で学んだ人物の言葉をなぜか作品に書いたり(笑)。子どもの中ではいろいろな教科で学んだことがつながっている。確かに自分の担当している教科にだけ意識が向かってしまったら、学んだことをつなげてどんどん自分を広げていっている子どもたちの輝きを見取りづらくなることはあるかもしれないですね。

**箱崎**：そうなんですよ。今も橋田先生のお話を聞いて初めて「そうか、図工の時間に子どもたちは自然と算数で学んだことを生かして活動しているのか」と気付きました。こうやっていろいろな教科の先生から「この教科では子どものこんな姿が見られるんだよ」って教えてもらわないと、自

分の世界で完結してしまって、子どもの多様な姿が見えなくなってしまう。

**水野**：いろいろな教科の授業で、こちらが自然と「あの教科でやったよね」と言うことで、子どもたちがアンテナを張れるようにしてあげられるといいですよ。

**箱崎**：そうですね。こっちが言ってあげなかったら、最初はボーダレスだった子どもたちが、だんだんボーダーをつくってしまう。「算数の授業だから、今はこれを出すべきじゃない」というふうに窮屈な感じになってしまったら、悲しいですよ。本来だったら教科を行き来するのが学びだと思うので、行き来させてあげられない環境になってしまったらつまらない。

## 子どもがボーダレスであり続けるには？

**水野**：子どもたちが授業でアンテナを張るためにも、私たち自身がたくさんのアンテナを持っているのはすごく大事ですよ。

**武藤**：こちらで視点を持っているかどうかで、子どもたちへの手立てとか支援も変わってきますよね。私自身も今回先生方の文章を読まなかったら気付かなかったことがすごくたくさんあったんですけど、きっとそれは子どもも同じで、目の前にあるものをただ食べているだけだと気付かないけれど、「色合いを見てごらん」とか「分量に注目してごらん」とか「つくった人の思いを考えてごらん」などと伝えることで、各教科の視点の価値に気付けるんじゃないかと思います。

**箱崎**：多様な視点を持つには、まずは自分自身にいろいろなことに興味を持つことも大事ですよ。例えば、給食だったら献立表に料理名がカタカナで書かれていて「これは一体どんな料理なんだろう？」って思うものがあるじゃないですか。

**水野**：どこの国の料理？みたいな(笑)。

**箱崎**：そう！ちょっと知りたくなるじゃないですか。そういう自分が「知りたい！」って思ったこ



とを調べていけば自然と国際的なことや文化的なことなど、いろいろな教科に関連した知識が付いていくんじゃないかなと思うんですよね。

**武藤**：そうですね。まずは、教師自身が「何だろう？」「これってどこから来たんだろう？」「誰がつくっているんだろう？」のように、知りたい、調べたいという気持ちを持つ。そして、それを隣にいる他教科の先生方にも聞いてみる。そうすれば、自分とは違う視点からの意見が返ってきて、自分の世界もどんどん広がっていくんでしょうね。

**橋田**：一日の中で、そういう自分が持った疑問や、授業中に見られた子どもの姿を先生同士で共有する時間があるといいですよ。例えば、午後3時にみんなで話すティータイムを設けるとか(笑)。

**箱崎、水野、武藤**：それはいいですね(笑)。

\*山崎英惠，“食器の色が味を変え”。夢ナビ。2025-07-17。 <https://yumenavi.info/vue/lecture.html?gnkcd=g015258>, (参照 2025-12-18)





## MOVE No. 01

日文教育資料  
令和 8 年（2026 年）3 月 31 日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社  
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5  
TEL : 06-6692-1261  
FAX : 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33755

## 日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5  
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16  
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14  
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F-B  
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1  
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690